

抗インフルエンザ薬と 薬剤耐性ウイルス

(2014年11月14日(金) 於：東京)



高下恵美

国立感染症研究所
インフルエンザウイルス研究センター
第一室主任研究官



【司会】
河岡義裕

東京大学医科学研究所感染・免疫部門
ウイルス感染分野教授



田村大輔

厚生労働省健康局結核感染症課
新型インフルエンザ対策推進室室長補佐

(敬称略)

WHOネットワークによる世界的ウイルスサーベイランス および日米の耐性ウイルスサーベイランスの相違

河岡(司会) 今回は厚生労働省で新型インフルエンザ対策を推進されている田村大輔先生と国立感染症研究所(感染研)で抗ウイルス薬と耐性ウイルスを担当されている高下恵美先生とともに、「抗インフルエンザ薬と薬剤耐性ウイルス」をメインテーマとしてインフルエンザをめぐる最新のトピックについてお話を伺っていきます。まず高下先生から、WHOを中心とした世界の薬剤耐性ウイルスのサーベイランスシステムなどについてお話しいただけますか。

高下 インフルエンザのウイルス学的なサーベイ

ランスは、GISRS(Global Influenza Surveillance and Response System)というWHOのネットワークが担当しています。このネットワークには、世界に6カ所あるWHO協力センター(WHOCC)や各国のナショナルインフルエンザセンター(NIC)、H5ウイルスのリファレンスラボなどが含まれます。2014年11月末の時点で142カ所のNICが指定されていて、112カ国がカバーされています。NICは管轄地域の臨床検体を集めてウイルス分離をし、抗原性解析などを行って、その中から代表的なウイルス株とその臨床検体を管轄のWHOCCに送ります。引き続きWHOCCでは薬剤感受性試験や遺伝子解析、詳細な抗原性解析を行うという流れです(図1)。日本では感染